根白坂古戦場跡
― 歴史を訪ねる旅（１６）

下土橋　渡

宮崎市の中心市街地から日向灘沿岸に沿って国道一〇号を約２５㎞北上したところで左折して山側へ６㎞ほど入ると、宮崎県児湯郡木城町の中心地に至る。木城町は、東西２４㎞、南北わずか６㎞という帯状の土地に約４７００人が暮らす町である。町の中央を東西に小丸川（高城川）が流れ、これに沿って一部耕地が開けているものの、背後は急峻な山岳地帯となっていて、土地の８４％が山林原野である。

この木城町には、１９１８年（大正７年）に武者小路実篤とその同志が理想郷を目指して開村し現在も２家族３人が暮らす「日向新しき村」や、日本の福祉事業の先駆者で「孤児の父」といわれる石井十次が１９１２年（明治４５年）に開設した孤児院を源流とする「石井記念友愛社」などがあって、木城町はこれまで何回も訪れている町である。

木城町を訪れるといつも、かつて高城が置かれていて今は城を模したメロディ時計台が建てられている城山公園に登って、木城町のこじんまりした町並みや小丸川の流れを見下ろす。そして帰りには「根白坂古戦場跡」に立ち寄るのである。

木城町の南隣の西都市に至る県道３１２号線を城山公園から２㎞ほど南下すると、大きくカーブした登り坂がある。その坂を登り切ったところに木城町営バスの「陣の内」バス停がある。この辺りが根白坂古戦場跡である。「陣の内」とはいかにも古戦場らしいが、

今はバス停横に説明板が立っているのみである。車を降りて、これまで何回も読んでいる説明板を、ある感慨をもってまた読み直す。

豊臣秀吉は九州を支配下におこうとしたとき、島津氏に、薩摩、大隅、日向の三州と、肥後と筑後の半分をくれてやろうといったが、島津側はそれを一笑に付した。そのとき島津義久、義弘の弟、いわゆる島津三兄弟の末弟・島津歳久だけは秀吉との和平を主張した。しかし、いったん交戦となると、今度は徹底抗戦を主張し、島津氏が秀吉に降伏した後も死ぬまで秀吉に反抗を続けた。

九州征伐から5年後の天正２０年（１５９２年）、秀吉の歳久に対する怒りは頂点に達し、島津義久に歳久討伐の命を下す。同年7月１８日、歳久は長兄義久の追討を受け竜ヶ水（鹿児島市吉野町）に自害して果てた。享年五十六。同時に家臣２７名が後を追って殉死した。

島津歳久は、自害するまでの１２年間を著者が住む現在の薩摩郡さつま町一帯（当時の祁答院十二郷一万八千石）を治めた領主だった。領内を良く治め、また悲運の智将だったこともあって、地元における歳久の人気は絶大だった。今も現存する史跡や遺跡の多さがそのことを物語っている。地元では別名を「金吾さぁ」と呼ばれ親しまれ、歳久をまつる同町中津川の大石神社では、４００年以上を経た現在でも毎年九月、「金吾さぁ踊り」が盛大に開催され、遺徳を偲んでいる。

歳久には男子がいなかった。そこで、薩州島津家（薩摩出水）から長女の婿養子として島津忠隣（ただちか）を迎え入れた。「根白坂の戦い」は、島津氏が秀吉に敗北し、秀吉が九州を平定するに至った九州天下分け目の戦いだったばかりか、歳久はこの戦いで忠隣を失うのである。忠隣、享年１９。忠隣戦死の三ヶ月前に生ま

大城川合戦場跡

木城町役場前から見上げる城山公園

城を模した城山公園のメロディ時計台

小丸川（高城川）の流れと木城町の町並み

れたばかりの忠隣の嫡男・常久は、自害までの5年間を祖父歳久のもとで養育された。

上述した「ある感慨」とは、こうした史実に巡らす思いのことである。

一、二つの九州天下分け目の戦い

木城町は、明治の町村制施行により椎木村と高城村が合併して発足した合成地名であり、かつてこの地は新納院（にいろいん）と呼ばれていた。島津氏4代当主・島津忠宗の四男の島津時久が南北朝時代、新納院の地頭となってこの地に入り、高城（たかじょう）を築いて新納（にいろ）氏を名乗ったことに、この地の戦国時代の歴史は始まった。

高城は、北側、東側、南側が絶壁で、西側のみが平地につながっている標高６０ｍほどの台地の縁辺に建てられた山城であった。台地の西側には7つもの空堀が設けられていて、二度の大きな戦いでも陥落しなかったという山城の堅固さを誇った。

高城のある地は、現在では主幹道路である国道１０号から奥まったところにあるが、往古は、南へは薩摩に、北へは豊後（大分）に通ずる交通の要衝であったため、高城を制するものが南九州を制するとまで言われ、以後この城をめぐって激しい戦いが繰り広げられ、城の支配は畠山氏、伊東氏、島津氏、秋月氏と入れ替わり、一国一城令で廃城となった。

とりわけ大きな戦いだったのが、九州の天下分け目の戦いとなった１５７８年の「高城川合戦」とその9年後の１５８７年の「根白坂の戦い」である。

日向の実力者であった伊東氏は、木崎原の戦い（現在の宮崎県えびの市）で島津氏に大敗すると、豊後（現在の大分）の大友氏を頼って豊後へ退去していく。そこで大友宗麟は伊東氏の旧領を回復し自らのキリスト教国を建設せんと日向へ侵攻を開始する。これが「高

城川合戦」である。

大友軍は、高城の東に位置する台地に５つの陣を設け、総勢５万の兵で、高城を攻め、民家に火を放ち、三度にわたって攻撃したが、高城城主・山田新介有信（島津氏の家臣で、伊東氏の退却で高城城主に任じられた）は、島津義久の援もあって、盛り返し豊後勢を多数討ち取った。

その後、大友氏は、援軍を得て攻撃するか自分らのみで攻撃するか軍議が一致しない。すると、業を煮やした田北鎮周が味方を鼓舞するため無謀にも島津軍に突撃する。それに釣られる形で大友軍が出撃し、陣形が伸びきったところを島津軍に突かれ大敗した。島津軍は耳川(現在の日向市美々津)まで追討し、この間の草原は豊後軍の死骸で埋め尽くされたという。このため、「高城川合戦」は「耳川の戦い」とも言われる。

高城城主・山田新介有信は、この戦いの７回忌にあたる１５８５年（天正１３年）に、敵味方の区別なく戦死者の霊を慰めるために現在の児湯郡川南町に六地蔵塔を建立した。この供養塔は、現在は「宗麟原供養塔」と呼ばれている。

この戦いで一段と力をつけた島津氏は、飛ぶ鳥を落とす勢いで九州全域を攻めていく。それに対して、大友宗麟は島津勢が豊後に進攻するに及ぶと、自ら大坂城に赴き豊臣秀吉に救援を求める。天下統一を目論む秀吉は、宗麟の要請を受諾し、九州征伐に乗り出す。

９年後、高城を舞台に再び九州天下分け目の戦いが繰り広げられることになる。これが「根白坂の戦い」である。

二、根白坂の戦い

豊臣秀吉は、天正１５年（１５８７年）１月に九州征伐の動員令を発し、畿内や中

国・四国の諸大名による軍を九州に送り出した。３月上旬には秀吉の弟・豊臣秀長の軍勢が豊前小倉において先着していた毛利輝元や宇喜多秀家、宮部継潤らの軍勢と合流し、総勢１０万になった。

秀長軍は、３月２９日には日向北部の要衝である日向松尾城を陥落させ、日向南部へ進行、高城を包囲した。高城は堅固であったため秀長軍は無理に力攻めをせず、城を何重にも包囲して兵糧攻めとし、加えて島津軍が高城を助けに来るなら必ず通るはずの根白坂に砦を構築し、ここを要塞化して島津軍を迎え撃つ戦略を取った。

根白坂は先の高城川合戦において、島津義久が一軍を率いて戦況を見下ろす場所にした格好の高台であった。秀長軍は高城川合戦を研究し、先手必勝でまずこの根白坂を押さえたのである。

そして、秀吉の率いる本隊は、３月２９日に豊前小倉に着陣し、４月１０日には筑後に、４月１６日には肥後隈本(熊本)に進軍した。

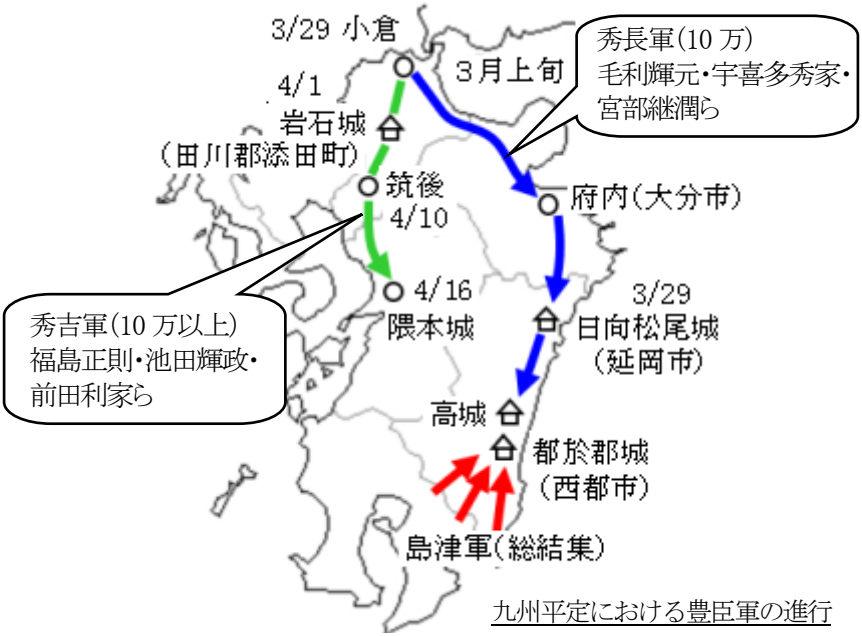
島津義久は九州西側から秀吉の軍勢が南下していることを知って狼狽した。秀長の軍勢に備えるために薩摩・大隅などの軍勢の大半を日向都於郡城(とのこおりじょう)(西都市)に結集していて、島津軍は九州西側の守備が手薄だった。

局面の打破を迫られた義久は、高城を包囲する秀長の勢に決戦を挑み、４月１７日夜半、根白坂に夜襲をかけた。しかし、それを予測していた宮部継潤は、多数の人夫を使い、深さ2間（約3．６m)、幅3間（約5．４m)程の堀を設け、堀の際に土塁を盛って、2間ほどの木や竹の柱を立て、柵を作り、さらにその中に鉄砲隊を組織し、厳重な体制で待ち受けていた。

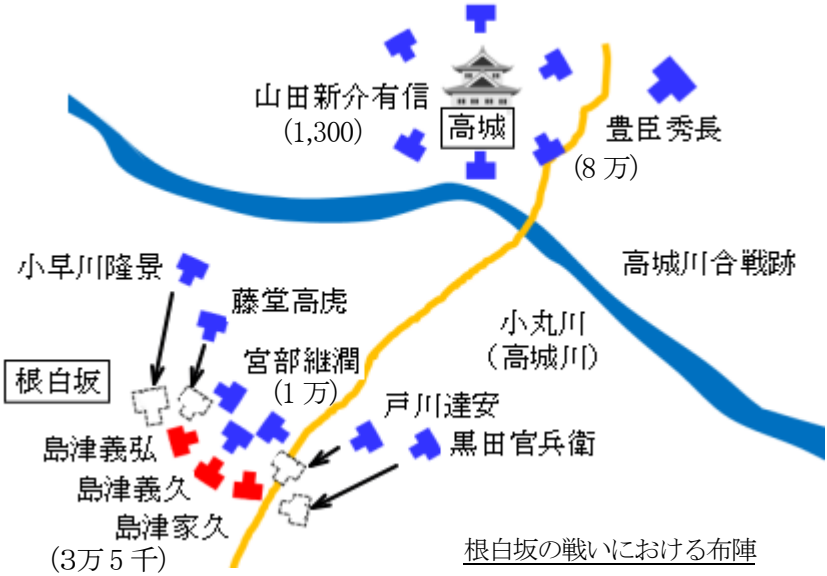
島津軍はその柵を倒すべく試みたが、苦戦

根白坂（陣の内バス停と「根白坂の戦い」説明板）

根白坂（陣の内バス停から西へ入ると、一帯は台地になっている）



九州平定における豊臣軍の進行



根白坂の戦いにおける布陣

を強いられ突破できずにいたところへ、藤堂高虎と戸川達安の手勢らが宮部継潤の救援に向かい、島津軍を翻弄。さらに小早川・黒田勢が挟撃を仕掛けたため、島津軍は、島津忠隣・猿渡信光等ほぼ全員が討死し完敗した。

義久・義弘は僅かな手勢と共に都於郡城に退却した。根白坂における主力決戦に完敗した島津氏は軍を立て直す暇もなく、島津義久は戦意を失い、剃髪して龍伯と号した上で５月８日、泰平寺（現在の鹿児島県薩摩川内市）で秀吉に謁見して降伏した。

高城は、この時になっても陥落せずに抵抗を続けていたが、義久の説得により、城主・山田新介有信は開城し、九州内における天下分け目の戦いはようやく終結した。

三、島津忠隣（ただちか）

永禄１２年（１５６９年）、島津氏の分家・薩州家６代当主・島津義虎と御平（島津義久の長女）の次男として生まれる。１５歳の天正１２年（１５８４年）、男子のいなかった大叔父・島津歳久の養嗣子となり、歳久の長女を室とした。

天正１４年（１５８６年）、叛乱した筑紫広門（現在の佐賀県鳥栖市）征伐の副将に任じられ初陣を果たしたが、１７歳と若年であったため二人の武将を付けられたという。同年、岩屋城（福岡県太宰府市）の戦いにも参加して軍功を上げた。

天正１５年（１５８７年）４月１７日の根白坂の夜襲で鉄砲傷を被った忠隣は、出血はなはだしく家臣・鎌田囚獄左衛門政金に水を所望した。しかし水がどこにもなかったため、囚獄左衛門が傍らにあった青梅を引き千切って含ませてやると、忠隣は満足したように絶命したという。享年１９。家臣らは遺体を盾板に載せて退却した。

四、歳久自害の後 ～ 日置島津家の成立

天正２０年（１５９２年）７月１８日に島津歳久が竜ヶ水において自害したとの悲報が宮之城に届くと、歳久夫人、忠隣夫人、忠隣の嫡男常久（当時６歳）をはじめ、家臣一同は、処分を不服としてただちに祁答院虎居城（現鹿児島県さつま町宮之城屋地）に立て籠った。この籠城を怒った島津義久は、宮之城の大窓寺の和尚宛に書簡を送り、直ちに下城するように促した。

一ヶ月の籠城の末、常久成人の際に旧領を回復するとの条件で籠城をといた常久親子と祖母、家臣は、義久の命を受けた入来院１５代重時が宮之城に赴き一行を連れて入来城に移ることになった（島津歳久の母は入来院１１代入来院重聡の娘・雪窓夫人であった）。

さらに１０月、細川幽斎によって、入来の堂の原（現在の薩摩川内市樋脇町塔之原）３００石を知行された。この３００石は堪忍料（生活を維持していく費用）とされ、２年後の文禄４年（１５９５年）の所替えによって常久は日置、山田、神之川（現在の日置市日吉町日置、山田、神之川）３６００石を知行された。祖父の島津歳久を初代当主、父の忠隣を第２代当主、常久を第３代当主として日置島津家が成立した。

（元九州職業能力開発大学校教授）

【参考にしたサイト及び図書】

（１）根白坂の戦い ― ウィキペディア
（２）島津忠隣 ― ウィキペディア
（３）神園清秀『悦窓（歳久公室）・蓮秀（忠隣公室）並びに袈裟菊丸（常久）の宮之城籠城』（島津金吾歳久公四百年祭志、平成７年１１月発行）